

オオマツヨイグサ

牧 幸 男

キミソウは美しい植物名である。多くの人は、この植物を竹久夢二の「宵待草」の詩や太宰治の『富嶽百景』の小説に登場するツキミソウの植物を想像するだろう。しかし、夕やみ迫る頃開花し、朝萎んでしまう黄色花が咲く植物について、『新訂 牧野新日本植物図鑑』には「白い花が咲くツキミソウ（ツキミグサ）*O.tetraptera*は野生化せず、鑑賞用に植えられているにすぎない。」の記述がある。



長野県生薬㈱に持ち込まれたオオマツヨイグサ

いわゆるツキミソウの植物名を調べると、オオマツヨイグサが該当するらしい。オオマツヨイグサの植物名を耳にしても、一瞬間の植物かと考えてしまう。ツキミソウの名を付けた植物を『新訂 牧野新日本植物図鑑』で調べると7種類が掲載されている。牧野富太郎博士は「オオマツヨイグサをツキミソウと呼ぶが間違いで、ツキミソウは白い花を開く別の種類である。」と述べ、「寒さに弱く、きゃしゃな植物で、野生化せず、今日ではほとんど見られない。」と記述している。

今回は、オオマツヨイグサを詳しく説明したい。オオマツヨイグサはアカバナ科北米大陸の原種を基本に、ヨーロッパで作り出された園芸種と言われている。現在は、南北アメリカ、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、オーストラリアと世界的な広範囲に野生化している。

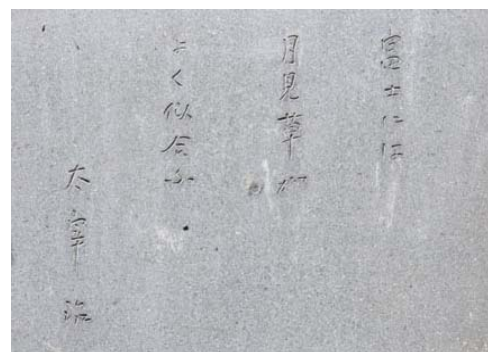
我国には、明治初年(1870頃)渡来し、全国各地で広く野生化した帰化植物である。大形で高さ1.5m内外に成長、根は白色直根、茎は直立、硬い毛があり時々分枝、枝先花序となる。夏の夕方大きな黄色い花が枝先に連なって開き、翌朝にしぼむ。種子は褐色から黄褐色、長さ1.3~2mmで角張って皺が多い。この種子は80年も休眠すると言われている。私たちは、誤ってオオマツヨイグサをツキミソウと呼んでしまったのである。

オオマツヨイグサをツキミソウの植物として有名にしたのは、竹久夢二と太宰治であろう。

竹久夢二(1884~1934)は、千葉の失恋の思いを郷里岡山の旭川河原のオオマツヨイグサを見て大正6年(1917)に「宵待草」を詠んだと言われている。当初「待宵草」で発表したのが、宵に花を咲かせていた姿から、発表後を誤って「宵待草」にした、ことさら改めずそのままにしたと伝えられている。歌詞は

待てど 暮らせど 来ぬ人を 宵待草のやるせなさ 今宵は月も 出ぬそうな

太宰治(1896~1948)は、『富嶽百景』で「3776mの富士の山と、立派に相対峙し、みじんもゆるがず、なんと言ふのか、金剛力草とでも言ひたいくらゐ、けなげにすくっと立ってゐたあの月見草は、よかった。富士には月見草がよく似合う。」と書いている。ツキミソウを金剛力草と表現しているが本来はそんなに強い植物ではないと思う。小説の舞台、御坂峠に足を運んだことがあったが、この場所はツキミソウの生育環境ではなく、オオマツヨイグサなら想像できる場所だった。太宰治は、この花の短い花期と自分の運命を重ね合わせて表現したのかもしれない。彼はこの峠の天下茶屋に滞在中に甲府の女性と婚約し、翌年結婚した。しかし、その翌年(昭和23年)玉川上水で入水自殺、人生を終えた。この文学碑はその死を悼んで井伏鱒二さんの尽力で峠に「富士には月見草がよく似合う」の言葉を刻んだ文学碑



「富士には月見草がよく似合う」の碑

が建てられている。碑の文字は太宰治のペン字を拡大したものである。

花の一生を人生のはかなさと重ね合わせ共感を覚えるのか、日本人に比較的好まれる植物であると思う。特に一晩だけの命を大切に光輝いている花として詩歌にもよく取り上げられるが、渡来時期から明治以降に限られている。

きざりす きこゆる夜の 月見草 おぼつかなくも 只ほのかなり	長塚節
夕やみの ほのけき庭に うきいでて かすかにゆるる 月見草の花	相馬御風
黄の上に 緑の露や 月見草	川端茅舎
月見草 夕月よりも 濃くひらく	安住敦

植物名は、大待宵草は、大型の待宵草の意味である。待宵草は、花が夕方になると初めて咲くので宵を待つと表現した。中国名は、黄花月見草、紅萼月見草である。

次に、月見草は花卉が白く、夕方に開花するので、これを夕月にたとえたものである。漢名は待宵草や月見草を使うことがある。

学名は、*Oenothera erythrosepala*、属名は*inoso*(酒) + *ther*(野獣)の意で、根にブドウ酒様の香気があり野獣が好む意、種小名は全面に堅い毛があり基部が紅いのが由来。

薬用は、全草や種子、根を鎮痙薬、抗血液凝固薬として、また咳、風邪に内服する。

大待宵草や待宵草を月見草と呼ぶことは間違いかもしれないが、承知して使うことである。最近の分布を見ていると、大待宵草は荒地待宵草の勢い押しされ気味でなかなか目にすることができなくなっている。

『新訂牧野新日本植物図鑑』収載のマツヨイグサ関係の概略を記述する。

メマツヨイグサ *O.biennis*

北アメリカ産の2年草、高さ1mに成長、花は紅色、中心は白、が萎むと橙色を帯びる。オオマツヨイグサより小形、明治中頃渡来、日本名「雌待宵草」。



イロマツヨイ *G.odetia amoena*

北カルフォルニア産の一年草、高さ40~60cm、花は紅色で中心は白、園芸種、マツヨイグサに似ているが、赤色が濃い、「色待宵」の意味。

コマツヨイグサ *O.laciniata*

北アメリカ南部原産、海岸に多い、高さ50~780cm、花野色はクリーム色、日本名「小待宵草」

ヒルザキツキミソウ *O.speciosa*

北アメリカ原産の多年草、高さ30~60cm、タンポポのような葉、昼間は花が咲き鑑賞用に渡来、日本に帰化後は、流出して雑草扱い、日本名は「昼咲月見草」

ツキミソウ(ツキミグサ) *O.tetraptera*

北アメリカ原産、園芸植物としてマツヨイグサと同時に渡来、高さ60cm、花色は白色、月見草の意で、夕方開花するので夕月にたとえて呼んだ。日本名は「月見草」

マツヨイグサ *O.striata*

北アメリカ原産の二年草、高さ20~50cm、花色は淡黄色、野生化している、日本名は「昼咲月見草」。

